

# 感情の過去・現在・未来

## Past, Present, and Future Feelings

福田 正 治

これまで感情に関して感情階層説（進化論的感情階層仮説）を基軸として、感情に関連する諸問題を議論してきた<sup>(1,2)</sup>（図1）。感情の研究は現在も進行中で新しい知見や理論が次々と発表され、感情の理解は常に塗り替えられている。しかし感情階層説は少なくとも感情を論じる場合、全ての点で合理性を失うことはなかった<sup>(2)</sup>。

人間は言語記録という知能を獲得して1万年、その間に人間の感情の特性が変化したかを問うことは、生物の進化という20億年の時と比べれば一瞬の出来事でしかない。しかしこの一瞬の出来事の中に、人類は遺伝子操作の技術を身につけ20億年の自然の変化を数時間で実現できるようになり、科学技術は地球という環境を人為的に変えようとしている。さらに極端に述べるならば、これらはここ200年の出来事で、さらに未来は、先進国での資源対立の精鋭化、地球環境の深刻化、情報社会による統制、心の格差などに代表される未知の領域が広がってきている。

感情階層説は感情の成因を20億年の生物進化の中に根拠を求めたが、今日人間を取り巻く自然、生活、情報環境は急速に変化している。そのような環境の中で感情はどのように変化していくのか、特に人間の感情の変化を考えてみる必要がある。人間の動物としての情動はおそらく不変だが、社会的感情や知的感情は人間の関係性の変化、文化や人為的環境によって見かけ上、変わっ

	分類	脳の局在	特性	対象
感情 (広義)	情動	原始情動	原始脳 感じる情動	単に生きる 身体 sense
		基本情動	情動脳 湧き上がる情動	うまく生きる 個体 excite
	感情 (狭義)	社会的感情	社会脳 育む感情	かしこく生きる 社会 educate
		知的感情	知性脳 学ぶ感情	人間らしく生きる 文化 learn

図1 感情階層説（進化論的感情階層仮説）

ていく可能性がある。特にダーウィンの進化論で論じた自然環境が人工的環境に変わりつつある中でヒトの適応はどう変化していこうとしているのか、その点をこの論文では考察する。

## 1. 感情の過去

ヒトという動物がどのような能力でもって、この500万年間、地球という過酷な自然環境の中で生き残ることができたのだろうか。この問題を解決することが感情の過去を探る手助けになる。動物は外部からエネルギー源を得なければ生きていけず、その中で最も効率が高いエネルギー源は動物性タンパク質であった<sup>(3)</sup>。現存するチンパンジーが時に狩りをし、肉を食することから<sup>(4)</sup>、原始人は動物性タンパク質の価値を早い段階から見つけていたに違いない。二足直立歩行の結果から生じる手の自由度は狩りをする能力を飛躍的に拡大し、捕獲者から身を守る手段をも提供した。近くの石を投げることや、木の棒を振り回すことが猛獣から身を守る防御法であることをすぐにも知った。さらに石を投げることによって大きな動物でも倒せることを知った人類は、離れたところから安全に獲物をとる知恵を次第に獲得していった。そのうち石をより強力に投げる道具も見つけたであろうし、棒の先にひじりをつけることによって獲物を殺すことができることも知った。また弓や投石器は届く距離を10m単位から100m単位に延ばした。目的を持って石を投げる能力は、高次の運動能力と認知能力を要する<sup>(5)</sup>。武器はこのようにして手の延長として獲得され、攻撃と防御の両方に供された。

原始時代の人々は協力して狩猟生活を行い、平等に食物分配を行っていたと述べられることが多い<sup>(6)</sup>が、果たして本当だろうか。ヒトの生活がチンパンジーの生態の延長と考えるならば、平等社会はなかったと考えるのが妥当である。というのは地球上で完全な意味での平等社会を形成している霊長類は存在せず、例にあげられるボノボでも母系社会を形成し平等を保つために非常な努力をしている<sup>(7)</sup>。この問題は感情の進化を論じる場合の重要な点で、特に社会的感情の進化において集団の形態がどうであったかは社会的感情の本質になる。社会的感情は、手の自由度の獲得が身体の延長としての能力の個人差に反映され、集団での階層性の確立によって強く影響されていった。つまり石を投げる場合、飛ぶ距離、標的への正確性において、訓練では得られない個人の能力差がある。当然のことながら原始人にも個人差があったに違はなく、そこからくる狩猟での役割、獲得数の違いが出てくる。これが集団の構成に影響することは必須であり、武器の発明は体の大きい強い者が集団での上位になることを意味せず、小さいものでも運動能力と認知能力の差によって、階層性に差が出てくることを意味している。狩りは集団としての統率が求められ、そこにボスの存在があり、個人差による役割の違いが出てくる。霊長類の群れはボスを中心とした階級社会を形成しており、その連続体としての原始人もまた階級社会を形成していた。そこに社会的知性と呼ばれる多くの操作が行われ、幅広い社会的感情が形成されていった<sup>(8,9)</sup>。

ついで、ヒトは火を使う知恵を身に付けた。火を使うためには脳の進化がなければならず、火を作る因果律の理解、そのための道具の原理なども理解されなければ火を日常のかつ継続的に使えない。さらに火を用いたことは植物や木の実も調理することで食材の幅を格段に増やし、食糧

事情を飛躍的に改善することにつながった。それよりも重要なことは、保存や調理という方法が発明され、収穫の端境期にも熱を通すことで食することが可能な食料の年間の平均化ができたことである。肉類もそのうち保存方法を獲得したに違いなく、この中に所有の芽生えが出てきている。私的所有は不平等を発生し、多くの社会的感情を作り出してきた。

火はまた、感情の進化に大きく影響した。夜行性の動物が徘徊する夜はヒトにとって非常に危険なものであった。40万年前頃から火を獲得することによって、動物が火を避けることを知り、夜行性猛獣からの安全性や火の温かさからヒトは火の周りに自然と集まってきた。洞窟の中の火を中心とした集団は夜や天候の悪い日に長い時間を家族と過ごした。何を思いながら過ごしたか考える中に、新たな思いやりや助け合いなどのヒトの感情を考えることができる。ネアンデルタール人の埋葬の遺跡を見るにつけ<sup>(10)</sup>、時間の共有の長さがあったに違いない。

人類はこれまで食料が全体として満たされることは一度もなかった。ヒトは河川の氾濫、旱魃、地震、火山活動、台風、冷害、疫病などの自然災害に晒され、それに対して全く無力であった。食糧生産は自然に左右され、自然を制御しようにもその術は限られていた。自然を制御できない以上、食糧確保はヒトにとって最大の問題であり、常に基本情動の恐怖が強力で働いていた<sup>(11)</sup>。基本情動の発生は、身体を防御し、いかに食料を確保するかにかかっている。ヒトは走るのも遅く、力もなく、とても肉食獣に素手で立ち向かえる存在ではなく、道具と知能などの何らかの手段がなければ、捕食されるだけでこの地球上から姿を消したであろう。それでは手の延長としての道具や武器があれば、自然の中で一人で生きていける存在かということ、それだけの感覚能力も持たない中途半端な存在でしかなかった。動物は、速度や腕力など特殊な運動能力や視覚、聴覚、嗅覚などの認知・識別能力を進化させて、この問題を解決しようとしたが、ヒトはそのような戦略を取らず、他の哺乳類とは別の戦略を進化の中で採用した。その一つが集団の力の認識であり、道具の発明や火の発見もこれらを補強しただけである。ヒトは集団という効能を発見し、500万年間維持し続けてきた。ここに社会的知性が磨かれ、社会的感情が大きな比重を持つてくるようになった。集団の中での協力と競争を基本とした社会的感情は、500万年の間、強固にヒトの中にしみこみ、脳の構造までも変わっていった<sup>(9)</sup>。さらに経験の伝承は集団の維持にとって必須であり記憶能力までも変えていった。

文明は大きな河川を中心として数万年前からおこり、4-5大文明が認められている。その文明の発生の原動力は農業生産と考えられ、それを中心として都市国家が形成された。人間の集団はその時点から、動物の集団の原動力とは異なる力で動き出した。集団の掟は恐怖を基礎とした君主制や封建制の制度として作られ、権力という力によって、食料と安全は管理されていった。つまり民衆はどのような危機の中でも村や町の集落を作り、その中で生きていかなければならず、そこから抜け出るとは死を意味した。西洋を席卷したペストに対して城壁を強固にして、旅人を一切入れない方策を採ったこともあった<sup>(11)</sup>。時に食糧危機は国境の変更の誘惑を抑えること

ができず、ある集団は隣接する豊かな町を求めて攻め入り、それに対する防御は頑なに城の中に閉じこもるか、ドミノ式に攻め入るかにかかっていた。これらの攻防の成否は集団の結束にかかっていたといっても過言ではなく、結束の敗れたところから侵略されていった。そこでは集団間の調整は、積極的に行われるのではなく、一種の空白地帯のバランスの上に実現されたものが多かった。

生存には家族や集落のつながりも強く求められた。家父長制は集団を維持する霊長類からの知恵であった。兄弟喧嘩は集団の中でどこまでが許され、どこからが禁止されるかの学習の場であり、家族は模倣学習、観察学習を通じて集団を維持するに必要な感情規則を学んだ<sup>(12)</sup>。家族の絆は集落の基本単位であり、そこでは絆を強める社会的知性である協力や協調が重きを置き、裏切りや騙しの競争原理は遠ざけられていた。つまり感謝や思いやりが大切で、ただ乗り、ルール破り、嫉妬はご法度であった。

これら集団形成を伴う社会的感情は、人間が自然を制御するか、食糧生産を制御できるかの技術を身に付けない限り、生物としての宿命である。常に飢えを満たすことが生物としての基本であり集団の基本原理である。このような宿命がこれまで議論してきた情念や感情の分類の中に欲望が含まれていることから推測される。過去、人間は、欲望、特に飢えからの解放が、人間の心的な問題の主要な課題であった。スコラ哲学、仏教、儒教、そしてデカルトに共通する情念の中の欲望の導入<sup>(1)</sup>は、貧困がもたらす心の占める割合の高さを反映している。欲望は集団の結束を乱すものとして厳しく統制することが求められた。感情は集団の団結を強固にするものが強調され、そこからはみ出すものは悪の道徳として体系づけられ強力に排除された。法律は集団の維持を大命題として構成されていた。仏教では、煩悩として欲は人を苦しめるものとして統御することが求められ<sup>(13)</sup>、キリスト教では大罪として7つが挙げられ、その中に肥満が入っている。性の歴史もまた統制の対象であり、どの文化においても性の欲望の活性化は、集団の規律を満たすとして規制された<sup>(14)</sup>。

農業生産が始まってから、豊かさは原始人の狩猟生活と比較すれば、限りなく安定し生産量も次第に増加した。世界人口推計によれば西暦1年ごろの世界人口は2億人程度だったものが、1500年ごろには5億人に増加している<sup>(15)</sup>。しかし依然として環境との相互作用は一方通行であり、自然災害にはほとんど無力であった。集団は都市や国家を構成しているものの、世界の人口の90%以上が農民で、わずかに10%以下の人々がそれらの食料に依存する支配階級、商人、僧侶などであったが、それでも全員の腹を満たすだけの食料は生産されていなかった。大多数の農民は、自分が生産したものであっても十分に口に入れることができず、感情で言えば基本的情動の恐怖の支配下にあった。しかし恐怖だけで何千年を生き続けることは不可能で、民衆にとって「助け合う」こと、家族や地域の集団による互助や力が生き残る知恵であり、そうでなければ過酷な支配の下では生き抜くことは不可能であった。そしてその片隅に、出し抜くとか騙す、狡猾な協同等の行為が見え隠れしていた。民衆は隠れて多神教の神を敬い、祭日のみ恐怖の解放、生の喜び許さ

れるという状況におかれていた<sup>(16,17)</sup>。人間の長い歴史には民衆の情念が記録されず、巨大な情念が底辺で渦巻いていた。

18世紀まではこのように貧困が社会の底流に流れているために、人間一人ひとりの感情は基本情動が主で、それを止揚する意味で社会的感情が明確にされ、それが集団の感情であった。集団間の戦争は止むことなく、至るところで侵略戦争が起っていた。自然災害、伝染病の流行が起これば、その動因は強くなる一方であった。

## 2. 感情の現在

「現在」という時間的区切りをどこに設定するかは扱う対象によって異なるが、感情の「現在」がどこから始まったかを考えるに、1800年あたりから物語を起こしたほうが都合がよい<sup>(15)</sup>。1800年代までに産業革命が起り、食料生産の制御や工業化が起り、貧困の代わりに豊かさや幸福という言葉が民衆を対象に聴かれるようになってきた。そこは農民の大半が都市に押し寄せてきた時期に相当し、人口増加や豊かさがそれまでの増加率と比べて不連続に飛躍した時期に相当する。

産業革命は、食糧生産に技術革新をもたらした。そして食糧の資源開発により、人口増加に余裕ができ、これが今日まで続き、現在では地球人口は65億人にまで成長している。この間にも、食料をめぐる戦争は起こったが、それは以前のような食糧分割を求めるものではなく土地に付随する工業資源獲得競争であり富の分配であった。この200年間、戦争は絶えることはなく、しばしば地球上の境界線は変更された。群れの規模の伸長であり、大きくもなり、国の栄枯盛衰は常であった。

そんな人類の姿ではあったが、集団間の争い、また集団内での争いを防ぐ人間の知恵をめぐる人は少なからずいた。前節でも述べたように、人間は細々と、人間とはどうあるべきかを考えていた。プラトンは理性というものの重要性を指摘し、感情に囚われない人間の姿を理想として求めた<sup>(18)</sup>。宗教は愛という概念を拡張し、寛容と許容性を拡大することによって集団間で、また集団内での共存できる方策を訴え、仏教では欲の弊害から無我を唱えた<sup>(19)</sup>。

後半にいたると、人間に生得的に付与されているという基本的人権の考え方が導入されてくる。自由の基本は、本質的に集団に属さない自由、集団間を移動できる自由であり、平等は基本的に食料分配の原則であった。これらを保証することによって、人間は知恵をさらに広げる時間を獲得していった。

国境を越えた国際協力は、国際連合として今日に至っている。経済、科学文化、教育、食料、その他様々な分野に地球規模、すなわちグローバル化の概念が浸透しつつある。先進国はその技術レベルの高さと資本力により、食料のほとんどを輸入に頼り、先進国での食料問題は見かけ上、解消されてる。日本では特にそうで、飽食の時代として食べ物の節約という概念が薄れてきてい

る。お金を出せば世界のあらゆるものを食べることができるという幻想と、また少しの実体を持って成り立っている。世界を広く眺めると、アフリカでは10億人もの人々が飢餓で苦しんでおり、現在においても地下資源の獲得で戦争が起こり、国境が侵され、食べるにも苦勞する国がいたるところにある。失業率は高く、意欲だけでは食は満たされず、不満を吐き出す方向に困っている。そしてこの資源格差は、一旦、境界を含む資源争奪になると、国際連合も無力になる。世界のグローバル化の影に、世界的な物質格差があり、それが感情格差を引き起こしている。貧困の中に住む人にとっては、中世の農民のように、恐怖の支配につながれ暴力が唯一の解決手段と考えられている。

理想として人類は、平和共存の概念は学んだが、依然として核兵器は脅威として有効性を保っており、民族や国家という概念は経済発展を遂げた先進国でも強固になることはあれ消え去ることにはなかった。しかし200年前の時代ほど野放しにされることがないのも事実である。

このように現代世界は二極化の方向にあり、貧富の格差は拡大しつつあるのが現状である。ここで議論するのは、先進国における感情の現状である。そこでは見かけ上、食料問題は少なく、社会保障もある程度整い、飢えて死ぬ人はわずかである。人間の欲望は所有が関係する豊かさに移っていき、お金ですべての物が手に入る社会として多くの人が認めている。

このような世界の食料と安全は二極化の方向にあるとするならば、感情も二極化の方向にあるというのがこの結論である。一方は飢餓に苦しみ安全が脅かされ恐怖と怒りの基本情動が生活の大半を占め、人と人との連帯という社会的感情の中だけでしか生きられない世界であり、他方は建前としては人類の自由、平等、博愛に関連する知的感情が支配する世界か、社会的感情の基盤が失われていく緊張した世界である。どのような感情がその時代で主流を占め、進歩をもたらすかは、食料と安全の背景で動的に変わっていつている。感情階層説はそのような動的な解釈をも含んでいる。

### 3. 感情の未来

感情の発生は動物界を見渡すと、常に食住の問題から生じている。もし人間の衣食住が満たされる社会が実現したとしたら、感情の姿はどのようなになるだろうか。それは天国か、極楽か、地獄か、しっかりと考える必要がある。

食料の問題を論じるならば、すべての生物は未だかつて地球上で食物が十分に確保されたことはない。地球上の65億人の胃袋を満たすだけ食料は生産できていない。しかし局所的に眺めると、先進国といわれるところは経済発展を遂げ、必要な食料を世界中から集め、見かけ上の衣食住が満たされた社会を形成している。日本では餓死した人がいてもわずかであり、それが社会現象として騒がれることがなく、むしろ「グルメ」が強調される社会である。少なくともお金を出せば、十分な食物を得ることが可能である。そして日本では食物生産の現場と消費者とかけ離れ、消費者はボタンを押せば、自動的に弁当が出てくると思える社会になってきている。

そのような社会は、これまで述べてきた進化論から眺めると、少なくとも限定された資源を獲得しなければ生きていけないという競争の危険性はひとつもない。ないというより社会の中で見えてこない社会が形成されている。そしてすばらしいことに、競争に敗れた人は社会保障によって守られており、このような社会を宗教では天国や極楽として描いた。

このような社会での感情の発生や役割はどうなるのだろうか。第一には食料のための集団を形成する必要がないということである。もちろんお金を得るための集団というものは必要であるが、日本ではある程度の生活費はアルバイトやパート雇用で手に入れることができる。そこには全般的な豊かさをあきらめれば、金を手に入れるための集団の機能も必要でなくなる。

集団を維持する必要がなくなると、感情もまた変化せざるを得ない。特に社会的感情の利他的感情の部分がなくなると、集団に束縛されなくても、最低限のお金と食料が手に入るようになれば、これまで社会の基本単位であった家族という群れも必要でなくなり、家庭はある程度の成長まで留まっている仮の姿となり、互恵の必要性は少なくなる。助け合いは貨幣経済の進展とともに衰退し、核家族化は更なる人間関係の希薄化に拍車をかけ、地域や連帯という言葉も無力化しつつある。

このような推移が戦後日本で起こり、現在さらに強力に進行しているのが現実である。第二次世界大戦後の日本は、世界でも手本となる高度成長を遂げ、今日の生活レベルは格差が広がっているとはいえ、それなりの衣食住は満たされてきた。見かけ上、そのような安全で安心な環境の中で、感情が進化してきた基盤が失われている社会で、家族が、心が、地域が大切だと叫んでも何の力にもならない。

だから、食料不足に陥り、自然災害に見舞われ、人々が助け合って生きていく社会がよいかというと、誰もそれを望まない。大きな地震に見舞われたとき、ボランティアとして多くの国民が被災地に駆けつける姿には、社会的知性の協力や互恵がまだ生きていることを実感させてくれるが、豊かさは、社会的感情の基盤を確実にむしばんでいっている。

さらに社会が進み、コンピュータ技術の進展により、情報化社会では、集団を形成している人とのコミュニケーションの姿も徐々に変わってきている<sup>(20)</sup>。これまで人は人とのコミュニケーションのために表情筋の能力を500万年かけて進化させ、脳の構造までも変えてきた<sup>(21)</sup>。これは人と人のコミュニケーションの視覚情報の情報量の多さが感情伝達にとって重要であることの結果であった。現在の情報伝達はコンピュータ上の信号であり言葉が含む含蓄性はあるものの対面伝達の機会が減ったのは確かである。そしてネット社会では、肌のぬくもりもなく、声の温かみも感じられない、そして顔も知らない無名性の世界の中でコミュニケーションが行われている。確かに必要な情報は伝えられ生活の便利さは増しているが、人間の絆の伝達はあいまいになっている。さらに自分の現実の生活空間とは別の仮想社会をネット上に作り、その中に自己実現をさせる技術も出てきている。

人と人の関係では、喧嘩をすれば嫌な感じが起こり、職場での生きがいを失うがために、人は

いかに仲良く関係を保つかに現実社会では苦労している。しかし仮想社会では、喧嘩をしてもネットを遮断してしまえばそれで終わる社会である。感情の進化から眺めると不思議な社会の到来である。これまで述べてきた感情の成立基盤は集団の中で関係性を断絶できないがための多様性と複雑性であった。現実と仮想の乖離が必ずや現実社会の社会病理としてフィードバックしてくるはずである。またこのような社会が当たり前の社会として育つ若者の感情が適応という面から、世代間の乖離にならざるをえない。

仮想社会での現実の人間の感情の進化を推論することは難しい。感情を必要としない生活が理想かどうか不明だが、少なくとも現実社会は、身体が存在する限り、現実の人間と関係性を保たなければ生きていけない社会であり、多くの人はその中で、苦しみ、悩み、愛し、憎んでいる自分を見つめて生きている。それが存在するという事は生きている証であり、人間としての条件を満たしていることになる。感情があるということは、生きる希望、生きがいがあることであり、感情はそのバロメーターともなっている。感情の未来は想像力の問題であり、未来がどのような社会になっているかの問題である。現在の芽生えとして資源の対立の精鋭化、情報格差、環境問題の深刻さ、少子・晩婚・欠婚などが指摘されるが、これから考えられる感情は無感動、原理主義的と豊かさの極端化が進んだ感情格差、心の格差の社会になるかもしれない。協力と競争はこれまでの基盤ではあったが、社会的感情の基盤を持たない人々、豊かさを受受できない人々の新たな出現である。そのような人々が基本情動を強化するほうに向かうのか、新たな知的感情を見つけるのか、現代は壮大な感情進化の実験場になっている。

ただこの中で、仮想社会で実現できないことは、配偶者の獲得にかかわる感情である。これは現実社会でしか、実現することができない。そこにネット空間で生活している人々との乖離が起こってくる。しかしこれも生殖技術の進歩により感情を抜きにした子孫継続が近未来的に実現されようとしている。

#### 4. 感情の制御

感情の率直な発露は社会生活において困難を伴うことが多い。特に感情的な暴力を伴うと、これは犯罪になる。世の中には多くの事件があり、そこにはさまざまな人間模様が展開されている。性犯罪を繰り返す人、汚職に手を染める人、金の亡者となって詐欺に走る人、兄弟までも裏切る人など、実に多くのドラマがある。人は外部から、何でこんな馬鹿なことをするのか、また繰り返すのか、たった10万円のことでこれまで築いてきた人生を棒に振ったのかと嘲笑する。

なぜ人は感情に囚われてしまうのだろうか。そしてなぜ囚われてそこから抜け出ることが難しいのか、古来、多くの人が悩み、苦しんできたテーマである。そしてそこにいくつかの解決法を見出してきた。道徳がそうであり、法律があり、制裁を与えることによって、感情の暴発の抑制を期待する。どの人間も、10万円のことで刑務所に入ったり、今まで築いてきた家庭や職を捨てたくないという思いを抱くであろう。法律に反しない心の問題では宗教がこれまでの役割を担ってきた。人は愛することや慈悲を行うことにより救われると。

感情階層説はこのような問題に対してどのような答えを用意するのかをわれわれは説明しなければならない。そのとき、感情の誘引は何であったかを考えることがヒントになる。感情階層説における感情の誘引の基本をまとめると（図1）、原始情動は身体内部の維持が根本で、その判断基準はホメオスタシス（恒常性）にあった。最初に生物として、また動物として身体という実体がなければ、この物語は始まらない。それには摂食、飲水行動などの本能行動は恒常性を保つための必要条件となる。当然のことながらこの原始情動は個体の問題である。

次の進化の段階である基本情動は5種類あり、その根本は身体を外的な危険から守るということ、そして子孫を残すための競争に勝つことであった。誘引のひとつは動物が肉食という食性を有していることにある。外部からエネルギー源を入れなければならない宿命にある動物にとって、動物性タンパク質を取り入れるという効率的な選択を選んだ。そこに基本情動という判断基準を持った情動が消去できない理由がある。一方、有性生殖の進化は、必然的に雄雌の獲得競争を起し、そのような能力を持つ生物だけが残ってきた。

社会的感情は、群れの形成が誘引の根本である。群れを作ることの利点が進化の中で獲得され、そのような特性を持つ生物が残ってきた。群れを維持し、群れを守るための機能として協力と競争が社会的感情の基礎として発生してきた。

知的感情は、ヒトに特異的に存在するものとして定義し、言語機能や一般化、抽象化などわれわれが有している能力から発展させた社会的感情の人の部分が知的感情である。これは集団間の共生を主眼として人間が作り出してきたものである。

このような情動・感情の進化の流れを眺めていくと、基本的にいくつかの原則が見出される。一つはそれぞれの階層の問題点を解決するためにより高い階層の機能を持った動物が生き残ってきたということである。原始情動での矛盾は食性の変化であろう。捕食者―被食者関係が原始情動の機能だけでは適応を不可能としたがために基本情動の機能を進化させてきた。そして捕食者―被食者関係は群れ・集団を形成することでより強固な力を持つようになってきた。社会的感情は、極端な捕食者―被食者関係、つまり絶滅まで進むような矛盾を解決するために発生してきた。最後の知的感情は集団間の共存をどうするか知恵として出てこざるを得なかった。進化の示すところでは、より下の階層の論理で矛盾を解決することが難しいことを示している。

このことを人の社会に応用してみると、不快は、基本情動の喜びでもって保証し、基本情動の恐れは、群れの力で保証し、群れからの逸脱は、知的感情の博愛によって解決するという流れである。逆の解決法である基本情動の恐れは、自己の死でもってしては意味を成さないし、群れからの逸脱は、殺人でもって解決にならない。

ここにわれわれが何に苦しみ悩むのか、そしてそれを解決するためにどうすればよいのかのひとつのヒントが隠されている。この議論は以前、「感情の制御」でわれわれは二つの手段を持っているという中のトップダウンの方法に属する<sup>(1)</sup>。それは社会的感情の矛盾は知的感情によって、

基本的感情の矛盾は社会的感情によって、原始情動の矛盾は基本情動によって減少させられるという考え方である。もちろん、人間はそれ以外に、知的感情が基本情動の矛盾を直接抑えることも可能である。不快はスポーツするという知恵によって、うまいものを食べに行くことによって解消されることを知っている。

上でも議論したように感情の氾濫は現実社会の中ではさまざまな形で起こっている。ここでもし知的感情を学んでいない社会的感情が主たる世界で生きている人では何が起こるのであろうか。力が群れの中での基準であり、群れの中での抑止力は弱まり、自己中心的、狡猾な協同、欺きなども横行するであろう。さらに進んで社会的感情も発達していない世界では、身体の維持が主眼となり、殺人が主たる解決法になる。昨今起こっている青少年の親殺しの中にこのような要素を見つけることができる。

社会的感情の育成の場は家庭であり、家族であり、地域である。その機能が十分に発揮されなければ集団を維持することはできない。兄弟は、けんかの程度を学び、親とのじゃれあい、痛さの程度を知らしめてくれる。そして何を行ってはいけないか、どこまでが許されるのかを家族や群れを通して学んでいく。もしその機能を親が果たせなく、不十分な能力しかなかったとしたら、解決法はより下層の基本情動の手段に向かってしまう。親殺しや暴力は、おそらく判断機能の喪失の部分があったとしても、本人にとって当座の危険を解決する合理的な方法であったに違いない。しかし社会はそのような解決方法を認めていない。そう考えると子供の成長発達、社会的感情と知的感情の学習にある。原始情動は生まれる前から持っており、基本情動も遺伝子の中に存在する。アヴィロンの野生児のように狼の中で育ったと考えられる子供は基本情動までの感情しか育つことができなかつた<sup>(22)</sup>。人間は発達とともに対人コミュニケーション能力や自己を表現する能力などの社会的知性を学び、教育を通して共生の知的感情を学んでいく。ヒトは成長に長く時間がかかり、10数年の歳月を要する。その間、脳の成長も続き、感情の発達においては感情の臨界期または敏感期が大切である<sup>(1)</sup>。ほぼそれまでの期間の母親との愛着が、その後の子供の性格を決めてしまう。したがって感情の発達から考えて、3歳ごろまでは豊かで安定した家庭の中で成長することが望ましい。もちろんその後はほっておいても育つものではない。人間関係の緊密化と相互互助の関係の育成には、過保護や放任からくる感情経験遮断を避け、野外実習や自然実習などの文明の力を制限した環境の中で生活することがどういうことなのか、現代社会の感情問題解決の一方向のように思われる。

## 5. まとめ

われわれを取り巻く環境には、以前見られなかった厳然たる事実がある。それは地球という乗り物で考えるならば、人類全体を日本のような生活レベルで維持することは不可能であるということである。食料は有限であり、エネルギーもまた有限である。

有限性のこれらを戦争で解決するというのは、有史以来の方法である。人間は知恵をつけてき

たというが果たして、人間の欲望と感情の前で有効なのか、有限のものを、無限をベースにした知恵で乗り越えることができるのか、人間の将来に託された課題である。人類は恐怖という感情に対して、真に乗り越える術をまだ身に付けていない。博愛、愛、友情は局所的に有効ではあったが、大局的に有効であるかの証明は未だ発展途上にある。

バルカン半島の戦争はその姿を垣間見せてくれる。旧ユーゴスラビアは共産国としてそれなりの教育レベルを保っていた。入り乱れた民族模様ではあったが、それなりの共存をしていた。しかしあるときを境に、教育は何の役にも立たず、恐怖という情動と民族という集団の論理が主役を占めて、悲惨な結末を迎えてしまった。この事例から、人間の知的感情の危うさを危惧せざるを得ない<sup>(23)</sup>。

さらに考えていくと、われわれ人類が、45億年かけて生物学的に今日に至ったが、科学技術は進化論の枠の中で動いているのであろうか、それともヒトは進化論の大きな流れの中から次第に外れていっているのではないかと危惧を感じる。感情のメカニズムの研究の進歩から、感情が環境からではなく脳を介した人為的に制御される時代がやってこようとしているが<sup>(24, 25)</sup>、これからの適応は自然ではなく、情報化社会、工業化社会との適応に変わってきている。感情の未来にとって進化論は想像力として有効なのか、永遠に未踏峰の荒野であるといわざるを得ない。

以前は生活の中で喜怒哀楽を共に感じてくれる人が多くいた。ヒトが死ねば49日間共に死者を嘆き悲しんでくれ、喜びは日を分けて祝ってくれた。しかし現在は死は一日のこととなり、プログラム化され、日々の仕事の中に埋没してしまっている。人とのつながりは弱まり、関係性はいつでも切断できる状態に置かれている。喜びや感動もまた短時間に終わらせようとするほど人は忙しくなっている。このとき、人はどこに心のアンカーを求めているのだろうか。ヒトが社会的動物であるということは、ヒトが身体をもつ限り消し去ることはできない。いかなるグローバル化や科学技術が進歩しようとも、ヒトの脳を改造しない限り、捨て去ることはできない。とするならば人はどこかに土着性や関係性を求め続ける。それがどこか、またどのような手段かを考えたとき、常に霊的、宗教原理主義、スピリチュアルなどの感情が亡霊として現われてくる。人と人のつながりの中に、癒しを見つけられないとしたら、何で人を人としてつなぎとめておけるだろうか。

## 文 献

1. 福田正治 感情を知る. ナカニシヤ出版、2003.
2. 福田正治 感じる情動・学ぶ感情. ナカニシヤ出版、2006.
3. Alberts, B. et. Al. Molecular Biology of the Cell. Garland Publishing, New York, 1994 (細胞の分子生物学. 中村桂子他訳、ニュートン プレス、2000)
4. グドール、J. アフリカの森の日々. 赤尾秀子訳、BL出版、2002.

5. クロスビー、A. 飛び道具の人類史. 小沢千重子訳、紀伊国屋書店、2006.
6. 寺嶋編. 平等と不平等をめぐる人類学的研究. ナカニシヤ出版、2004.
7. ドゥヴァール、F. ヒトに最も近い類人猿ボノボ. 藤井留美訳、阪急コミュニケーションズ、2000.
8. Byrne, R. and Whiten A. Machiavellian Intelligence. Oxford University Press, 1988 (マキャベリの知性と心の理論の進化論. 藤田和生ほか訳、ナカニシヤ出版、2004).
9. Whiten, A. and Byrne, R. Machiavellian Intelligence. Oxford University Press, 1988 (マキャベリの知性と心の理論の進化論 II. 友永雅巳ほか訳、ナカニシヤ出版、2004).
10. 赤澤 威. ネアンデルタール人の正体. 朝日新聞社、2005.
11. Delumeau, J. 恐怖心の歴史. 永見文雄、西沢文昭訳、新評論、1997.
12. Balkemore, S. and Frith, U. The Learning Brain. Blackwell Publishing, London, 2005 (脳の学習力. 乾敏郎他訳、岩波書店、2006).
13. 渡辺照宏 仏教. 岩波新書、1974.
14. フーコー、M. 性の歴史 I. 佐藤亮一訳、新潮社、1986.
15. パースタイン、W. 「豊かさ」の誕生. 徳川家広訳、日本経済新聞社、2006.
16. ドリュモア、J. 罪と恐れ. 佐藤泰雄ほか訳、新評論、2004.
17. シューベルト、E. 中世ヨーロッパ万華鏡 3. 名もなき中世人の日常. 藤代幸一訳、八坂書房、2007.
18. 廣川洋一 古代感情論. 岩波書店、2000.
19. ひろ ちさや 仏教とキリスト教. 新潮選書、新潮社、1986.
20. トフラー、A. 第三の波. 鈴木健次ほか訳、日本放送出版協会、1981.
21. 宮司正男 コミュニケーション行動発達史. 日本図書センター、2001.
22. シング、J.A.L. 狼に育てられた子. 中野善達、清水知子訳、福村出版、1977.
23. Volkan, V. Bloodlines. Sanford J. Greenburger Assoc., 1997 (誇りと憎悪. 民族紛争の心理, 学水谷驍訳、共同通信社、1999).
24. Garland, B. (Ed) Neuroscience and the Law. David Press, Washington DC, 2004 (脳科学と倫理と法. 古谷和仁、久村典子訳、みすず書房、2007).
25. Gazzaniga, M.S. The Ethical Brain. Dana Press, 2005 (脳のなかの倫理. 梶山あゆみ訳、紀伊国屋書店、2006).